

# 中国のコロナ禍におけるロックダウンの個人々の経験と記憶に関する研究

SHANGGUAN SHICONG

新型コロナウイルスは、2019 年末に武漢において最初の感染者が報告されてから、瞬く間に世界各地に至るまで感染が拡大し、パンデミック(世界的大流行)へと変貌を遂げた。そしてウイルスの変異に伴い、その感染力が増加しながら重症化率が低下していったため、当初、各国は隔離や都市封鎖を代表とする流行病対策を実施していたものの、初期の厳格な政策を放棄し、コロナウイルスと共存する方向へと舵を切ったのである。一方、パンデミックの影響を最も早く受けた国の一つである中国は、2019 年末に武漢で初の感染者が報告されて以来、「ゼロコロナ」や「動的ゼロコロナ」というように最大限で感染状況を抑え込むために長期化された防疫対策を調整しつつ、集中隔離や「社区」に基づくロックダウン措置などの核心的な措置が実施された。しかし、最初の武漢感染時期の完全なる都市封鎖とは異なり、2020 年後半から徐々に、全国都市の各所に設置された PCR 検査施設による感染者の分布や移動経路のデータに基づき、住宅団地や街区などのより小さな地域単位における外出制限と都市間の人口移動の管理を行うものになり、いわゆる科学的な証拠を基盤とした「科学精確防控」の方針が強調されるのが一つの特徴をなしていた。しかしながら、2022 年からそうした状況は一変し、同じくオミクロン変異株の出現に伴い、感染者数が再び増加したため、従来のゼロコロナ方針に大きな課題が突きつけられることになって、「動態清零(動的ゼロコロナ)」の実現を目指して行われた防疫措置は、経済・社会的コストがかかるにもかかわらず、過去 2 年間のよう顕著な成果をもたらすことができなくなってしまったのである。

ここで留意すべきは、2022 年上海ロックダウンをめぐって、ソーシャルメディア上の投稿内容で示されたように、個人の体験と国家のナラティブとの間に何らかのズレが生じることが見えてきた。すなわち、国家が感染防止と生命保護における重要な勝利として賛美する一方で、市民がインターネット上で記録し共有した当時の体験や感情は、中国におけるコロナ禍のもう一つの側面を浮かび上がらせた。これらの表現と記録は、国家ナラティブを補完あるいは対抗するものとして、学術的な関心を集めて、過去の歴史的出来事に関する人々の記録と見解が持つ重要な意味を示していると考えられる。ただし、本稿では、国家叙述への対抗を意識しながら未来のために記録するというような意思を持つ個人々による広範的な参加で形成されていたインターネット上の記憶の表象を検討するのみならず、現実の中で生きている生身の個人々の持つ過去の経験にも留意すべきである点を強調しておきたい。モーリス・アルバックスに提起された集合的記憶論と金瑛による再解釈を踏まえて考えると、記憶とは、社会よりも個人による実践であり、社会的枠組みに依拠しつつ、過去に対して「現在から出発して再構成される」ものである。国家や集団が提供してきた諸文脈が、より深い過去からの個人々にも内在する経験や体験とも纏わりつつ、現在の叙述でなされているそのような記憶は、そのままの過去の知識や事実ではなく、あるいは個人自体の中で完結するものでもないと理解できる。そして、そのような個人々の記憶の実践は、情報化技術の進歩にともない「連結的な転回」が行われている現在にあっては、客観的な記録の形成だけではなく、その過去の事態を解釈し理解しつつ、さらに未来の想起と記憶の継承に繋がっていく事態にも関与していると言えるであろう。

以上を踏まえつつ、本研究では、まさに情報化時代に生じたコロナ禍に対し、記憶としての個人経験の捉え方として、同じくアルバックスをめぐる議論と金によるその社会的枠組みに関する見解を理論的基盤として位置づける上で、時間と空間の文脈を提示し、過去の体験を再現しようとする物語により構成される主観的なコロナ禍の経緯を、「思考や体験の流れ」の連続性の内実とそれらが依拠している社会的

枠組みから想起される重層的な個人的記憶として捉えていくことを目的とする。ここでは関連する先行研究から示唆を得つつ、政策文書とソーシャルメディア情報を通じて、ロックダウン生活を規制し影響をあたえる政策とメディア文脈を考察しながら、国家・メディア・過去の狭間で模索している、中国コロナ禍後期における個々人のロックダウン経験と記憶に対する考察を深めることとした。

上記の課題を踏まえ、まず、政策に規制されたロックダウン生活を理解するために、政策文書と公式記者会見記録を通じて、中国全土および上海のロックダウン政策を分析し、それらに見られる基本的な特徴、そして人々の記憶を支える可能な時間と空間の道標を考察した。具体的には、中国の感染状況に応じた政策の時系列的な発展については、「突発的感染対応」、「常態化段階」、「動的ゼロコロナ」という三つの段階に分けることができ、さらに2021年8月から感染者数の増加により感染状況が再び厳しくなることがわかった。そのような発展によって、中国の防疫対策は、二重の側面を持つ厳格さによって特徴づけられている。それを踏まえつつ、上海ロックダウン期間中の記者会見記録から見えてきたように、ロックダウンというものは「社区」と「小区」をめぐって展開されることが明らかになった。以上のような政策は、人々の生活や行動を大幅に制限しつつ、小区のような物質的な空間だけではなく、社区という制度、様々な防疫関係者による人間関係、PCR検査などの事情、健康コードのような道具、さらに感染状況の情報というような精神的空間の要素を提供していたと考えられる。続いて、こうしたロックダウン政策の内容と特徴を踏まえつつ個々人の経験を理解するためにソーシャルメディア上の情動的な文脈を確認するために、中国のソーシャルメディア「微博」上の投稿に対するテキスト分析を行い、ロックダウン生活の現場での具体的な展開と人々の体験を考察した。上海ロックダウン期間中のソーシャルメディアの投稿を分析した結果、公式メディアは政策発表や通知を中心とした公式的な内容が特徴である一方、一般投稿者は個人的な体験や感情を多様な形式で表現していたことが明らかになった。両者は感染状況、防疫措置、物資供給といった共通のテーマを扱いつつも、個人の政策への態度や表現は多様で、支持と反対が入り混じっていた。これらの投稿は、ロックダウン生活をめぐる国家と個人の関係の複雑さを反映しながら、ロックダウンを経験していない人々の記憶想起を支える情動的な文脈ともなり得ると考えられる。

以上の国家政策とソーシャルメディア情報の文脈を踏まえながら、主観的な時間軸の構成とその中の不安の変化と各自の解釈をめぐって、上海ロックダウン経験者と非経験者を対象とするインタビューを2023年から2024年までの期間の中で展開した。その結果として、政策とメディア情報に依拠しつつも、個々人の立ち位置とアイデンティティに基づき自身の経験を再解釈している特徴が明らかになった。つまり、一方で、政策やメディア情報は、人々に共通する時間軸や記憶の枠組みを提供し、個人が感染症の経験を理解する手助けとなるものの、他方で、同じ枠組みに対する解釈や記憶の再構築に差異が生じ、その背後には個々人の立ち位置やアイデンティティとの繋がりが示された。その中で、今回の事例にした4人の場合、一般人や学生などのような様々な立ち位置があったにもかかわらず、自分の認知や能力範囲を超えたより大きな社会全体の状況を判断する上で、国家や政策に対する差別的な信頼を示していることが見え、個人と国家の分断や対立が国家意識の中で調和されたことが示された。

最後に、本研究の結果を総括し、政策とメディアの枠組みを基に、人々がいかに過去を再解釈し、個人と国家の関係を再構築していくかについて論じた。一方、本研究の限界を踏まえつつ、今後は、アイデンティティや中国における社会関係構造の特徴との関連性、さらには多様なメディアを通じて個人記憶を動的な文化現象として探求の必要性について議論を展開した。(環境行動学)